

# 豊森なりわい塾

調査団体名 : 豊森実行委員会  
 設立年 : 2009年5月  
 団体URL : <http://www.toyomori.org/>  
 取材日 : 2013年1月19日

団体代表者名 : 澁澤寿一  
 対応してくれた人の名前 : 中川恵子  
 調査員 : 太田 司、丹羽健司  
 レポート作成者 : 太田 司

## 活動内容

「余計な予備知識を一切入れずに取材をしてこい」と共同取材者から命を受け、筆者は豊森なりわい塾（通称「とよもり」。以下、豊森と記載）が何であるかを知らないまま取材地へと向かった。そして実際に「豊森とは何か？」ということが今回の取材ないし雑談の中心話題となった。取材対応者の中川氏によれば、豊森の活動が何であるかは単に断言しにくく、あえて言うならば、豊森的な幸福論を共有し追求する場であるという。塾内において「豊森的」という合言葉を共有しつつも、「豊森的」とはどういう状態であるかを自問し、塾生と塾自体が共に成長している様子が伺えた。

豊森は豊田市、トヨタ自動車株式会社、NPO法人 地域の未来・志援センターの三者の協働で行っているプロジェクトである。森林および里山を学びの場とし、人と地域づくりを考え、それらを活用する仕組みづくりと担い手を創出していく活動を行っている。塾生には都市部や里山地域から、学生やトヨタ自動車の社員など、老若男女が集っている。2009年から5年目の活動で、今期が3期目となる。

塾生たちは各講座で、地域コミュニティーの暮らしや経済など、特に森林と共に生活する里山の問題点などを学び、議論を深める。さらには、実践的なアイデアを持ち寄り、住民たちと共に里山の生活に活用するような取り組みまでも行う。過去の塾生の中には、ただ学ぶだけでなく、実際に里山での生活を選択し、移住を決意した者も少なくない。

このような議論の中で形成されるのが、彼らが口にする豊森的な活動である。豊森的な活動とは、さまざまなフィールドの人間たちが、それぞれの思いで、森林と里山について語り合い、実践に移していくことであるのだろう。まるでさまざまな色の絵の具で描かれた、一つの里山の風景が目浮かぶようである。そこには森と里を生業とする人間たちが生き活きと存在している。

## 会のモットー

地域を知り、地域に入る。まちとむらをつなぐ仕組みをつくる。自然に根ざして暮らし・しごとを創る。現代の百姓を目指す。

## 設立から現在に至るまで変化したこと

豊田市の農山村に関りながら、継続的に豊森を実施していく中で、多くの人たちが仲間とつながり、地域を見つめ直し、自分を見つめ直して、実践の伴う新しい価値観を持った人材が輩出されている。塾生の中から実際に山里に移り住んで、地域の針葉樹を活用した家具づくりの工房を立ち上げたり、ふるさとにUターンして事業をスタートさせるなど、地域に根ざした暮らしや事業を始める人や、農山村に関りながら新たな生き方を選択する人たちも現れた。

## 連携している団体・専門家・自治体など

とよた森林学校、おいでん・さんそんセンター、夕立山森林塾、地域再生機構など

## 山村再生や、その担い手づくりに関わる具体的な活動

カリキュラムの中でフィールドワークを実施し、地域の人々から知恵を学ぶ。また、地域住民と共に活動することで、共に山村を再生する方法を模索していく。塾生たちは豊森で学んだことを、それぞれの意図と方法で日々の生活や仕事に活かしていく。実際に山村に移り住むことを選択する者や、自主的に交流や農的な活動を行うものも数多くいる。

## 現在直面している課題

豊森での活動を広く知ってもらい、継続的な運営のための塾生を確保すること。

## チームオリジナルの質問

<質問内容> 豊森は何を目指しているのか。

<答え> 豊森が目指していることは、塾生が自ら考え行動していくことである。各塾生が当塾に来る動機は実にさまざま。「豊森なりわい塾」で学んだことをベースに、塾生たちがそれぞれの目指すものを実践していけば良いと考えている。シアワセな社会とは何か、これからの社会のカチをみんなで模索する、そのプロセスが豊森的なあり方。

## その他伝えたいこと

筆者が取材に訪れた際に講座が丁度開催されていた。豊田市足助の会館の一室では30人以上の人々が、山村の問題点と再生へのプランを熱心に議論していた。和気あいあいと話す彼らを見て、筆者は山村の問題点の解決方法への実に単純かつ最も重要なヒントを学んだような気がした。山村にこのような話し合いの場所が少ないこと自体が問題だったのではないだろうか。大勢が村のことを真剣に考え、自由にものが言える場所があり、そこには他所からの意見も加わり、いつも新鮮な話題であふれているナマの議論が行われる場所があまりにも存在しないのではないかと。そして同時に筆者は悲しさを感じた。それはそこに村人の実態との大きな隔たりがあり、この単純な解決方法が実践できない事実についてのやるせなさを感じたからである。しかしながら、種をまく人間がいなければ、もちろん収穫はない。ここ豊森には、それぞれの塾生がそれぞれ自分らしい希望の種をまこうとしている、何とも言えない心地よさがあった。

## 写真

